

戸隠神社



あをがき

青垣
 平成28年[春夏号]
 戸隠神社発行
 〒381-4101
 長野県長野市戸隠3506
 026-254-2001
<http://togakushi-jinja.jp>

戸隠 去来抄 第四回

文人と戸隠 特集 河鍋暁斎

河鍋楠美

河鍋暁斎(かわなべ きょうさい)、天保二(一八三一)年生まれ。当社は明治維新前、顕光寺と称していましたが、慶応元(一八六五)年、暁斎はその中院(現在の新社)にて龍の天井絵を描き、昨秋、百五十年を迎えました。昨年は、弟子のジョサイア・コンドルが設計した三菱一号館美術館での「画鬼・暁斎展」ほか各地で展覧会が催され、「芸術新潮」でも特集されるなど、その人気は高まるばかりです。今回は特集号として、暁斎のひ孫に当たる河鍋楠美先生に筆を執っていただきました。

暁斎の画業

暁斎が数え二歳の時、父の河鍋記右衛門は古河藩士から幕府の定火消同心甲斐氏を継ぎ、現在の茨城県古河市から江戸に一家を揚げて転入。七歳で浮世絵師の国芳入門した。その後、狩野派の前村洞和、狩野洞白について本格的に



狩野派を修業、十九歳で「洞都陳之」の画号を得るが、幕末から明治への政治的変革に伴う狩野派の崩壊により仕事が見込めなくなったため、独自で研鑽を続け、二十七歳頃、江戸琳派の絵師・鈴木其一の二女お清と結婚して大根畑(現在の湯島二丁目)に独立し、河鍋姓となる。この頃から狩野派以外の技量を用い、「狂斎」の画号で描き始め、戯画・狂画で江戸・東京庶民の人気を大いに博したが、明治三年十月に筆禍事件で捕らえられ、翌年に放免されてからは、音が同じ「暁斎(きょうさい)」と改号した。戸隠の龍は慶応元年の作であるから「狂斎」号で描いている。暁斎は他にも「周磨」等、多くの画号を用いた。

暁斎の画題の広さと応用力、持つて生まれたユーモア精神、人脈の広さは他の絵師に見られぬ特徴で、海外にも知られる絵師として生き抜き、名声を確立したのである。



図② 善光寺近傍洪水の図 狂斎画『暁斎画談』

『暁斎画談』によれば、慶応元年三月下旬に江戸を出発した暁斎は、熊谷を過ぎると山々の写生に時を忘れて旅程が遅れ、五月に善光寺に到着したとある。生憎、楯花川(犀川支流)の氾濫で善光寺が水難に遭い(図②)、暁斎も足止めされると、戸隠中院の天井絵を描く絵師を捜していた顕光寺(現在

暁斎の信州旅行

暁斎は、その根底に最後まで狩野派としての誇りを持ち続けていたが、狩野派の山水画は中国山水画の粉本(絵手本)を元に描いたもので、中国画の踏襲にすぎなかった。好奇心旺盛な暁斎は、善光寺にも興味を引かれていただろうが(図①)、日本の実際の山々を自分の目で見て描きたいと考え、信州行きを決行したようだ。この信州旅行は、暁斎にとつて生涯最長の旅であった。戸隠におけるエピソードは、自ら挿絵を描いた自画伝といえる『暁斎画談』(明治二十年発行)で十三ページにわたり記され、飯島虚心著『河鍋暁斎翁伝』にも詳しい。なお、虚心の著書は、暁斎を狩野派絵師として正当に評価していて貴重だ。



図① 牛にひかれて善光寺まいり 狂斎画『狂斎百図』



図③ 龍を画(えがく) 狂斎画『暁斎画談』

の戸隠神社)では、江戸の有名な画家が善光寺に逗留していると聞き、三十六坊協議の上、別当の使者が依頼に来られた。暁斎はそのご依頼を受けたわけだが、そこには、これまで見た以上の険しい山々見たさ、もあつたと思われる。『暁斎画談』中の龍の天井絵を描く図(図③)を見ると、大筆を揮う暁斎を多くの僧侶が見守っている。戸隠が未だ寺であった時代の様子が窺われる。描かれた龍の出来栄えから、更に龍の周りの格天井の六十八枚の図を所望されたが、雪が降ると春まで江戸に帰れないことを知り、暁斎は十四枚しか描かず帰ってしまった。この時、再訪を約束して山を下りたと、『暁斎画談』や『河鍋暁斎翁伝』には記されている。龍図は暁斎の奉納で、格天井の図は料金を払うと取り決められたが、支払われた記録はなく、その後、暁斎が戸隠を訪れる機会もなかった。格天井の図の完成を見ることはなかった。

描かれた十四枚は極彩色の花鳥図で、

※あをがき(青垣)とは切り立った険しい山が垣根のように連なる様子。当社では祝詞の中で「青垣成す戸隠山の麓に鎮まり坐す戸隠神社」と用います。

当時の専門家から「今後、これを描ける画家は絶対現れない」と絶賛された。中は昭和十七（一九四二）年に火災に遭い、それら花鳥図は龍図とともに焼失してしまった。長く惜しまれていたが、龍図だけは、平成十五（二〇〇三）年の式年大祭を機に、横倉英起氏等のご努力により日立研究所の神内俊郎氏等が研究されていたデジタル技法で、古い絵葉書を頼りに再現された（図④）。



図④ 中社社殿に再現された天井絵

あるが、護摩を焚いたため黒変し、元の姿は窺えなくなりました。そのほか、湯島にある宝林山大悲心院霊雲寺の「眠龍図」（掛軸・文京区指定文化財・図⑤）は、水中にトグロを巻いた姿が珍し

暁斎の評価

暁斎の作品は、修業を積んだ狩野派としての作品（図⑥）から浮世絵、琳派、円山四条派、文人画、さらには錦絵、本でも戯作本から啓蒙書や教科書、雑誌の挿絵やデザインなど多岐にわたる。デッサンの正確さ、ユーモア、筆の早さなど、明治天皇から名もない庶民、外国人に至るまで多くの人々に人気があった。しかし、分野毎

暁斎の龍図
現存する暁斎の龍図は、天井絵では深大寺元三大師堂天井絵（東京）が



図⑥ 毘沙門天之図（部分） 暁斎画 内筆掛軸 河鍋暁斎記念美術館蔵 幼名・周三郎時代、17歳の作と伝わる。



図⑤ 眠龍図 暁斎画 霊雲寺蔵

に評価する縦割り社会の日本では、理解し難い絵師となった。暁斎は、その作品が幕末から西欧に渡り、来日外国人と交流し、多くの外国文献にその名が登場するなど、北斎に比肩される海外での高い評価は昔も今も変わらない。一方、日本での評価は一時期その名前すら美術史から消えるほど低下したが、現在、少しは見直されてきているようだ。暁斎の評価が低い理由の一端は、評価を決める皆さんが作品の多くをご覧になっていない点にもあるようなかで、暁斎を知っていただくための努力が続けている。例えば、暁斎を「ぎょうさ

かわなべ くすみ氏プロフィール

河鍋暁斎の曾孫。蕨（わらび）眼科院長、東京大学医学博士。公益財団法人河鍋暁斎記念美術館理事長・館長。昭和6（1931）年、東京都生まれ。昭和52年収運河鍋暁斎記念美術館開設。暁斎作品の出版・集・展示、河鍋暁斎記念美術館友の会の出版・研究誌の発行、各種関連書籍の出版、各種関連書籍の企画開催などを通じ、今世紀中、暁斎展の見渡せるかどうかと言われていた全貌が見渡せるかどうかと言われていた暁斎の画業の研究・普及に尽力している。



暁斎先生のカエル好きは有名で、今回は河鍋楠美先生のご好意で「美人観蛙戯図」「猪に乗る蛙」（いずれも河鍋暁斎記念美術館蔵）からカエルの画を使用させていただきました。（編集部）

青龍殿 宝物館

この度、伊勢神宮の第62回式年遷宮に伴う御装束神宝撤下に当たり、当神社は「梓御弓（あずさのおんゆみ）」「銅黒造御太刀（どうくろづくりのおんたち）」「御楯（おんたて）」「御胡録（おんやなぎい）」を御下附戴きました。社宝として長く伝え、今後、宝物館にて展示させていただきます予定です。

◆暁斎展のご案内◆
「鬼才」河鍋暁斎展
幕末と明治を生きた絵師
【富山展】
六月二十五日（土）～八月七日（日）
於：富山県水墨美術館（富山市）
【愛知展】
八月二十日（土）～十月二日（日）
於：碧南市藤井達吉現代美術館